

2 写真家たちの記録

戦時下の物資不足の中、フィルムや薬剤は限られており、また空襲被害の撮影は情報を秘匿するために一般の写真家には許されていませんでした。緑川洋一ら一部の写真家は、岡山連隊区司令部所属の報道班に所属していたので撮影を許されていたようですが、終戦直後に司令部の命により、戦災の様子を撮影した写真は焼き捨てられたと言われています。牛窓防空監視哨長だった正本安彦も7月に来岡して、空襲被害の様子を撮影しています。しかし軍や警察などにつての一般の写真家たちは、終戦を迎えてから岡山の様子を撮影した人が多いようです。そして終戦後も占領下の日本ではそれぞれがひっそりと保管していたことでしょう。

また岡山空襲の写真は、長く「戦災」風景を記録した写真、という意味で捉えられ、撮影者の別や時期をきちんと表記せず、画像データだけが流用されていくことも多々あったようです。東京空襲の写真を岡山空襲のものとして紹介していたこともありました。こうした扱いのせいか、現在ではオリジナルのフィルムや焼付の所在情報や、撮影状況がわかる写真はごく少なくなっています。

* 緑川洋一は1945年（昭和20）に「座して召集になるよりも写真で奉公を」と、軍関係者に働きかけて岡山連隊区司令部に報道班を結成して班員となっている。（写真3、新聞社2、映画1、画家1の7人。）午前中は診療、午後は司令部詰めだった。自宅と司令部と、市内の清心女学院に暗室をつくって戦火にそなえ、街頭写真展「銃後の生活」（岡山市内）を開催したり、岡山・福山両市の被災状況を撮影しているうちに敗戦となったとしている。（『昭和写真・全仕事 SERIES・6【緑川洋一】』1982年緑川洋一著、朝日新聞社発行を参考にした。）



関西高等学校（北区西崎本町）の南付近の田の中から撮影された燃える岡山 小原義二 撮影

『山陽ジャーナル 6月10日号』（山陽ジャーナル、1960より）には「中央の黒煙は岡山駅、旧住友通信附近から爆発したドラム缶の油煙。左端の高い屋根は旧偕行社、左端の煙突は大供方面の工場」とあります。撮影者の小原義二は同誌に、ライカのカメラとリュック一つで逃げ、逃げた先で撮影したが、まだ暗く、かなりタイムをかけたのでブレた写真になったこと、撮影した写真で残ったのはこの1枚だけであるとしています。

天満屋岡山本店から撮影された岡山市街地 坂本一夫 撮影

上 6 1945年6月29日の岡山空襲から約1月後

下 7 1948年4月の岡山市街地

坂本一夫〔1912～1998年（大正元～平成10）〕は当時合同新聞社写真部に所属していました。この2枚の焼付は天満屋を中心にほぼ360度見渡すように撮影されていますが、これは岡山空襲後、合同新聞社が天満屋岡山本店の3階に社屋を借りていたことによるのかもしれませんが。

2枚の焼付は坂本一夫が保存していたもので、2008年に坂本一夫の遺族により公開され、2019年12月に岡山空襲展示室に寄贈されました。岡山空襲前後の時期の焼付やフィルムのオリジナルのものはほとんど確認されておらず、大変貴重といえます。





天満屋岡山本店から撮影された岡山市街地 坂本一夫 撮影

上 6 1945年(昭和20)6月29日の岡山空襲から約1月後

下・左 7 1948年(昭和23)4月の岡山市街地

6の写真の中央よりやや左には旧日本銀行岡山支店(現ルネスホール)が見え、その左に旧山一証券岡山支店、中国銀行本店、旧岡山赤十字病院などが並びます。画面右端には旧岡山電話局と旧岡山郵便局(現岡山中央郵便局)が見えます。旧日本銀行岡山支店は岡山空襲後に偽装のために黒く塗装し始めたこと、市街地がほとんど復興されていないことから、岡山空襲から約一月後、終戦ごろの岡山市街地を撮影したものと思われます。

7の写真も6とほぼ同じ場所、同じ角度で撮影していますが、こちらは画面左端に旧岡山セントラル劇場があり、看板には「マーガレットの旅」という映画のタイトルが掲げられています。この映画の上映期間から、この写真が撮影されたのは1948年(昭和23)4月のことと思われます。



空襲後の内山下付近の様子

写真左手奥には内山下小学校が見え、右手には天守を失った岡山城があります。撮影者は塩津静夫と思われます。



旧日本勧業銀行（現岡山市立オリエント美術館）屋上より南西から南をみる
平谷一登 撮影 1945年（昭和20）10月9日（スタンプ）朝日新聞社所蔵

中央左の黒く偽装された建物は旧三和銀行岡山支店、その隣が旧帝国銀行岡山支店です。この2つの建物間の道が現在の駅前通り、通称桃太郎大通りです。写真左奥には天満屋も見えます。写真裏面のスタンプは朝日新聞大阪本社写真部のもので、写真が撮影された日か、整理された日を示します。他に10月15日付のスタンプもあることから9日に近い日に撮影されたものと思われます。

写真説明
焦土再建
"岡山市の巻"
岡山市中心部
市西南一帯を望見
岡山市上之町一番地
日本勧業銀行岡山支店
屋上より望見
平谷撮影

朝日新聞大阪本社
20.10.9
写真部

(裏面画像データ 朝日新聞社提供)

裏面画像データについては
書籍版のみの掲載となります。

正本安彦の撮影した7月の岡山市街地

岡山空襲の際、牛窓監視哨は B29 の爆音を察知して大阪の中部軍管区司令部へ通信していましたが、担当将校は岡山への空襲はないと判断し、岡山県防空課に空襲警報の発令を命じませんでした。当夜哨長として勤務していた正本安彦は眼前で岡山が空襲されながら警報が発令されなかったことを大変悔しく思い、終戦後も牛窓監視哨の記録や資料を大事に保管し、岡山空襲のあった夜と、機雷が投下された日の様子の手記を残しています。そして7月上旬には岡山市を訪ね、13枚の写真を撮影しており、フィルムが残されていることからその足取りを追うことができます。



8 「上之町より日本赤十字病院を望む」



11 天満屋岡山本店



9 禁酒会館付近



12 「栄町口より中銀を見る」(中央左の建物は旧日本銀行岡山支店)



10 「上之町通りの焼跡」



13 「東方より天満屋を仰ぐ」

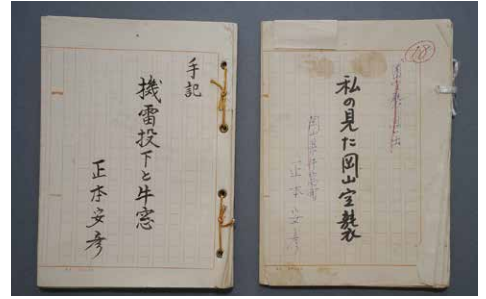


1 内山下付近
2 内山下国民学校の校庭
3 内山下国民学校の校庭
4 場所不明



5 場所不明
6 「難波町のスナップ」
7 場所不明

←7月上旬の岡山市街の様子を撮影した写真(8pの写真も含む)にはフィルムのコマの順番に番号をふっている。「」内は別の焼付が貼付されたアルバムの正本安彦自身の書込みを引用した。



18 『私の見た岡山空襲』 正本安彦 著
19 『手記 機雷投下と牛窓』 正本安彦 著
いずれも正本写真館所蔵

緑川洋一の残した写真

緑川洋一は戦時中、岡山連隊区司令部の報道班員であったからか、戦災の被害の様子について撮影することを許されていたようですが、連合軍が進駐する直前に全て焼却させられたようです。しかし、岡山空襲後からそれほど時間がたっていないと思われる画像データも数枚あります。また1946年(昭和21)4月に撮影された一連の岡山市街地の写真は、中筋と呼ばれた現在の岡山駅前商店街の闇市の様子や焼跡に立つバラックなど、他の写真家が撮影していない被写体が多数写されています。これらは「戦災直後の岡山市焼跡の写真」と書かれた封筒の中に「焼跡1」などと手書きされた包紙に入っており、80コマを超える35mmモノクロフィルムの形で残されています。残念ながらオリジナルの焼付は発見されていませんが、終戦翌年の岡山の様子が見事にあらわされた一連の作品ともいえます。



自宅の焼跡に立つ杉鼎 かなえ 岡山市北区駅前町 1945年(昭和20) 緑川洋一 撮影



自宅の焼跡に立つ男性 1945年(昭和20) 北区上石井 緑川洋一 撮影



自宅の焼跡に立つ女性 1945年(昭和20) 場所不明 緑川洋一 撮影



上の写真の杉鼎さんが経営していた「杉衣服店」。駅前商店街にありました。撮影者不明 個人所蔵



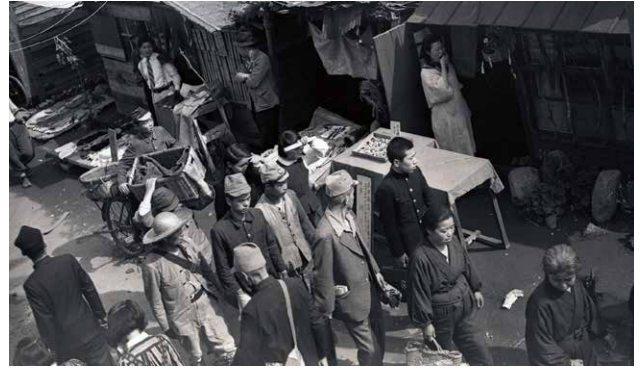
自宅を再建する人々 1945年(昭和20) 緑川洋一 撮影



焼跡を耕す人々 岡山駅付近 撮影時期不明 緑川洋一 撮影



中筋・闇市の様子 1946年(昭和21)4月 緑川洋一 撮影



中筋・闇市の様子 1946年(昭和21)4月 緑川洋一 撮影



バラックの様子 場所不明 1946年(昭和21)4月 緑川洋一 撮影



天満屋から南を見る 1946年(昭和21)4月 緑川洋一 撮影

宗政博と矢延眞一郎の撮影計画

『山陽ジャーナル 6月10日号』(山陽ジャーナル、1960より)は岡山空襲の罹災状況を撮影した写真家のインタビューを特集しており、宗政博と矢延眞一郎の記事からは当時の状況が少しわかります。岡山市職員だった矢延眞一郎は「奈良航空隊を除隊帰岡した当時は只茫然と何を見ても悲しみの中に過して、好きなカメラを手にする時ありませんでした。」とあり、終戦後少し落ち着いて「職場の友であり写友でもある」宗政博と種々計画し、撮影しようとしたがフィルムがなく、入手が困難だったうえに休日の日曜日は雨が多くなかなか撮影できなかったようです。また悲惨な生活を送る人々も撮影したかったが、報道関係者でもないのに写される立場の人が気の毒で撮影できなかったことも残念だったようです。

一方の宗政博も岡山市職員であり、当時は公会堂地下室に疎開していたために屋根が抜けた公会堂やその屋上から眺めた一面焼け野原の市街を見て写欲をそそられたこと、戦時中は禁じられていたので、終戦を待つようにして矢延眞一郎を誘って撮影したとあります。

後に矢延眞一郎が岡山市福祉援護課に寄贈したと思われる焼付の裏面には1945年(昭和20)10月11日から11月9日までの日付が記入されているものがあり、この期間に撮影したものと思われる。どの写真がどちらの撮影によるものかは、遺族の聞き取りからいくらか推察できるものの、確定できない写真が多くあります。矢延眞一郎が保管していたフィルムや関連資料は既に失われており、新しい資料の発見に期待するばかりです。



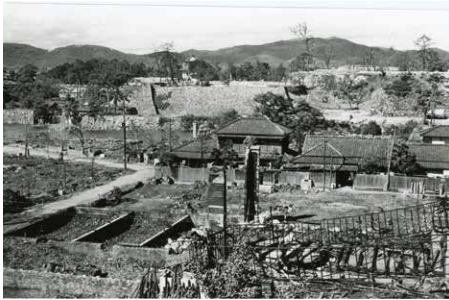
現在の県庁付近から西を見る
1945年(昭和20)10月11日の日付あり、矢延眞一郎 撮影



多くの犠牲者が出たとされる田町橋付近
1945年(昭和20)10月29日の日付あり、宗政博 撮影

宗政博と矢延眞一郎の撮影と思われる写真 1945年(昭和20)10月～11月頃

「内引用は「山陽ジャーナル 6月10日号」(山陽ジャーナル、1960より)によるもの。



北区丸の内付近 画面奥に岡山城の石垣が見える



西川沿いの卒塔婆



内山下付近カ



左の建物は旧岡山県図書館 北区蕃山町



場所不明



「西中山下楠町付近」



1945年(昭和20)9月の台風による増水
内山下付近から見た旭川



場所不明



旧協和銀行岡山支店



岡山城外下馬門跡 北区内山下 現岡山県立図書館付近



「内山下石山付近」



「現山陽新聞社付近」(北区下石井付近)



場所不明



旧岡山市公会堂、現在の岡山県庁付近



高熱で曲がった鉄塔

吉田堅の定点撮影

1945年（昭和20）10月から1951年（昭和26）7月まで、約6年間日本銀行岡山支店の屋上から天満屋方向と南西方向の二方向を撮影し続けたのが吉田堅です。終戦時に24歳、日本銀行岡山支店の職員でした。復興対応に追われる中、終戦から2ヶ月後にふと銀行の屋上から西の天満屋、岡山駅方面と南西の西大寺町から岡山医科大学の二方向を撮影しました。カメラの中のわずか2枚のフィルムはこれで終わってしまいましたが、貴重な終戦直後の写真となりました。

転勤で岡山を離れる1951年（昭和26）まで同じ場所から復興状況を撮影した計14枚の写真は、日時も記入された状態で保管されており、岡山空襲展示室に寄贈されました。



1945年（昭和20）10月



1945年（昭和20）10月



1946年（昭和21）5月



1946年（昭和21）5月



1946年（昭和21）8月



1946年（昭和21）8月



1947年（昭和22）2月



1947年（昭和22）2月



1948年（昭和23）4月



1948年（昭和23）4月



1949年（昭和24）6月



1950年（昭和25）6月



1950年（昭和25）6月



1951年（昭和26）7月



1945年（昭和20）10月



1947年（昭和22）3月 救国貯蓄運動のキャンペーン車

終戦直後のインフレをふせごうと、日本銀行岡山支店の行ったキャンペーンの宣伝の入った車です。背景は岡山駅です。吉田堅の撮影した写真には、戦時中から終戦直後までの岡山の様子をとらえた貴重な写真が多くあります。



岡山城天守付近
1945年(昭和20)秋 山崎治雄 撮影



旧カトリック岡山教会
撮影時期不明 上田あつ子 撮影



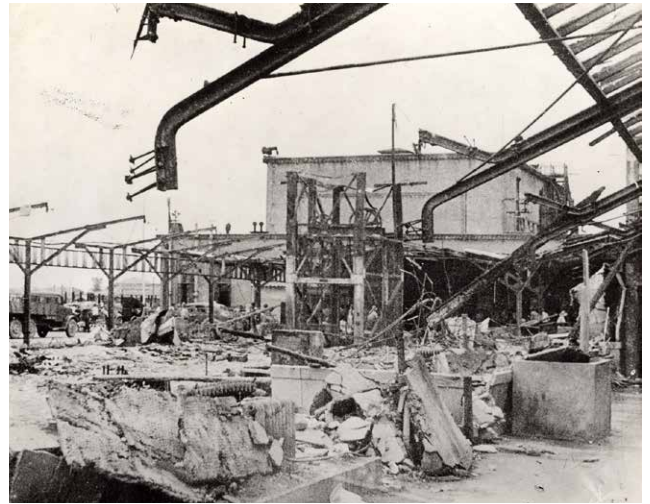
旧カトリック岡山教会
撮影時期不明 上田あつ子 撮影



現岡山県立美術館付近から南西を見る。画面左手あたりに旧岡山県会議事堂や郷土館があった。1946年(昭和21)6月以降、英連邦軍関係資料
呉市文化スポーツ部文化振興課 提供



岡山城焼跡 林の間の人は復興に動く岡山第一中学校生徒とされる。
撮影時期不明 松浦硯二 撮影カ



岡山駅
撮影時期不明 松浦硯二 撮影カ



観測塔のみを残して全焼した岡山測候所跡
撮影時期不明 松浦硯二 撮影カ



現在の中国銀行本店付近から天満屋方向を見たもの。
撮影時期・撮影者不明